

休暇，停年及び老後の一般理論

田 辺 英 蔵

The General Theory of Vacation, Retirement and the Life of After-Retirement

Eizo Tanabe

Japan has become, with unbelievable speed, a country which enjoys having most oldest people in the world, and is becoming a country where the share of old people is getting large with also the highest speed ever. The major part of recreation [leisure] problems in Japan is the study how to cope with the increasing aged people.

The purpose of this paper is to compare the “vacation and after-retirement” in Europe and USA with that in Japan. I hope this study would be helpful to devise a counterplan for aged people in Japan.

Q : I heard that the most Japanese people do not or cannot take vacation in general. Why ?

A : One reason is that they don't want to be reproached for taking vacation by their colleagues or others.

Another is that they have no strong desire [incentive] to take vacation.

Q : Are there any exceptional Japan?

A : Yes, some. Civil servants, employees (except for executives) of leading companies

and banks, and working women except for those in career.

Q : What is one of the most fatal problems to the retired Japanese?

A : It is the fact that they have no preparation for their life of after retirement and no idea how to spend their last days.

Q : What is the preparation?

A : Their sentiments should be cultured at home from their early childhood.

Q : What kind of sport would be good and suitable for old people?

A : Not competitive, not group oriented, not required specific places to play.

Q : What is the ideal life style of old people?

A : An idle life, or do nothing particular. [Do whatever they like whenever they like.]

目 次

序章 日本人の休暇と老後の問題点

第1章 休暇について

第1節 日本人の休暇の実状

第2節 休暇をとらぬ理由

- 1) 与えられた権利
- 2) 周囲の目
- 3) 休暇に対する意欲の欠除

第3節 “贅沢の甘い香り”

第4節 休暇をとらぬ日本人の例外例

- 1) ノン・キャリア・ウーマン
- 2) 役人, 銀行員, 大企業の従業員

第2章 停年, 引退

第1節 引退の潮時

- 1) 早ければ早い程好い
- 2) 出来るだけ引き延ばす

第3章 老後の準備

第1節 老後準備の経験則

第2節 “Lead, follow or get out of the way!”

第3節 回帰の旅

第4章 老後の passtime の実際

第1節 分類

第2節 具体的内容

- 1) 奉仕活動
- 2) 創作活動
 - * 絵画について
- 3) スポーツ

*老人に適したスポーツ

*ふれあいと孤独

*ゴルフについて

*テニスについて

4) 鑑賞——受動的な楽しみ

*美食について

*読書について

5) kill time (時間殺し) 暇潰し

6) 死ぬまで働く

終章 無為

序章 日本人の休暇と老後の問題点

日本は人類史上に類を見ぬ速度で世界一の長寿国となり、同じく世界史上空前の速度で老人国へと突入しつつあり、わが国に於けるレジャー問題の過半が急増する老人の老後対策と見なされている。本論の目的は海外のリゾート地に見られる欧米余暇先進国民の「休暇、引退、余生」のとり方、送り方と日本人のそれとを比較考量し、日本人の老後対策に資せんとするものである。

第一章 休暇について

第1節 日本人の休暇の実状

日本の社会（或は会社）に於ける休暇の問題点は休暇がとれぬことである。世界第二の経済力を持つと評価される日本の平均的なサラリーパーソン（給料生活者）の夏休の限度は一週間である。十日はまず無理と考えられる。欧米では休暇の単位が一週間であり、彼ら（彼女らを含む。以下同様）は夏休としては2、3週間（半月近く）をとるのに比し、日本人の休暇は極端に短い。あるリゾート地で遇ったドイツ人（中年実業家）は冗句を交えて次の如く語った。

「ドイツでは休暇の必要最小限の長さは4週間と考えられる。休暇の第一週目はひたす

ら今までの疲れを癒すために使う。次の週でようやく立ち直り、休暇を楽しむ為^いに身構える。第3週は存分に遊ぶ。4週目はそろそろ帰る仕度にかからねばならぬ」。

第2節 休暇をとらぬ理由

周知の通り、日本の労働者は敗戦後、世界で最も進んだ労働法規を手に入れ、その後の目ざましい経済成長のおかげで、少なくとも一流企業、中堅企業の従業員は相当日数の有給休暇を与えられているものと期待される。にも拘らず、多くのサラリーパーソンが自らの権利である休暇を消化し切れずにいる理由は次の三者と考えられる。

1) 与えられた権利であること。

2) 周囲の目が厳しいこと。

3) 自主性の欠除。

の三者である。

1) 与えられた権利

日本のサラリーマンが所与の休暇の権利を行使しない理由はその権利が与えられたものだからである。1945年8月の敗戦を契機にわが国では六百万人の労働者が“一朝にして”組織された。マッカーサー司令部に依って施行された労働法規は極めて実験的で世界でも最も進んだ労働法規であると喧伝されたが、

その法規は

「与えられた権利であって、労働運動先進国イギリスに於けるが如く“血によってあがなった”ものでは無かった」(労働法学者渡部一高)。

与えられた最先端の労働法規と労働者の意識の乖離を単的に示すのは戦後労使間に当然のこととして普及したチェックオフ(会社が給料から組合費を差引いて組合に渡す)制度である。

「組合費の納入は組合員の団結の象徴である。組合事務所がどんなに離れていてもそこへ赴き、少額の貨幣を箱にボタンと投げ込むことが組合員の団結の象徴であり、組合費を会社に徴収して貰うなどということは英国の労働組合員には考えられない」(渡部一高)。

だが、戦後の日本の組合の実状では「もしチェックオフ制度が無ければ組合費は集らない」(ある大企業組合幹部)というのが本音だった。権利の行使には信念と意志を必要とする。与えられた権利は放って置けば行使されぬのは当然である。上記が日本のサラリーパーソンが所与の休暇を消化せぬ第一の理由である。(脚注1)

2) 周囲の眼

筆者の記憶に依れば、かつて犬飼道子女史が次のような追憶談を書かれた。

彼女がアメリカの大学で教職についていた折、休暇をとりたいと思い、病気、所用等いろいろな理由を述べたところ、主任教授は親切に夫々の理由の解決法をアドヴァイスして呉れるので女史は降参し、実は単に休暇がとりたいのです、と白状したところ教授は破顔一笑し、「バケーションをとることは学校を休む最優先の理由だ」と云って授業時間等を

- 1) 筆者は実業界在職中一部上場会社を含む四つの会社に勤務し、組合委員、人事部長、労務担当役員を経験した。

調整して彼女の休暇をとり易いように手配して呉れた。

このような社会通念は日本社会には存在しない。実状は逆であって、日本の社会では周囲が陰に陽に、意識無意識にプレッシャーをかけ休暇をとりにくくする傾向があることは多くのサラリーパーソンのよく知るところである。少くとも積極的に(休暇をとることに)協力するケースは稀である。「周囲」の中には「上役」「同僚」「部下」(或は「取引先」等)も含まれる。

他の一例を挙げれば、大学では教授・助教授が一定年限勤務すれば一年間の有給休暇をとる権利が生ずる。この場合の「休暇」とは自由に研究をする時間のことで、サバティカルと称し、多くの教師は海外に赴き、何がしかの補助も期待されるが、この「休暇」の消化状況は必ずしも好くない。周囲が必ずしも協力的でない。もとよりある教師のサバティカルの実行は彼又は彼女のカリキュラムの穴埋め等数々の調整を必要とするのはサラリーパーソンの休暇と変るところはない。周囲の人々がその負担を甘受し、彼又は彼女の権利の行使に協力するかわりに、少なからざる一部の同僚が意識無意識に彼又は彼女のサバティカル実行に依って生ずる問題点をあげつらう様は、多くのサラリーパーソンの休暇の場合と変らない。

西欧の古典——ロマン・ローランと記憶する——の中に有名な“豚の比喩”がある。豚は泥の中に身を横たえ、体内に泥をなすりつけ、泥まみれになり、皮膚の最後の一片まで泥に染り、白い部分が無くなって初めて安心する、みんなが不幸になることでみんなが安心する世間にそっくりだ、という比喩であったと記憶する。この比喩は生物学的にはいささか信憑性^{びよう}に欠ける気もするが、人の才能や成功をそねむ平等思想の比喩としては適切と思われる。上記豚の比喩の如く、所謂「不幸均等思想」すなわちみんなが休暇をとらな

くて安心する日本社会の心理的（時に物理的）プレッシャーが日本人の休暇をとる権利の行使の第2の障害と思われる。

3) 休暇に対する意欲の欠除

古くから日本のサラリーパースンの間では、次のような「休暇を取る法」が語り継がれている。休暇をとるには、

- 1) 計画性
- 2) 決断力
- 3) 意志

の三要件が不可欠であるとする伝承である。具体的には、休暇の計画を立てるのは早ければ早いほど好い。

フランス人が夏のバカンスから帰って来て直ちに作る会話は、土産話ではなく来年の夏のバカンスの計画であると云われる。

計画を立てたならばその計画を折に触れて周囲——上役、同僚、部下（if eny）——に周知させる。これをパブリック・リレーションズと云う。そして思い切って休暇をとってしまう。すなわち決断である。決断力の無い人物は遂に行動することはない。必要なのは「何としてでも休暇をとろう」とする意志である。その意志が欠ければ計画性も決断力も烏有に帰する。もし日本のサラリーパースンの心の中に休暇をとらんとする燃えるような熱意が存在しないのなら、休暇について百年論議を続けても日本人の休暇日数は増えないと思われる。

第3節 “贅沢の甘い香り”

休暇をとらんとする意志の源泉は、「贅沢」である。

モーロアの英国史によれば、19世紀の前半、“日没すること無し”とその繁栄と広大を誇った英国では、選挙法の改正と産業革命に依って除々に部厚い中産階級が型成された。彼らは旧来の貴族達の豪華、優雅な生活様式を「激しい敵意も無しに、あたかも素晴らしい

無台の上の豪華な生活の中で名優の演技を見るように」喝采と共に眺めた。「当時の貧民の悲惨な生活状態を考えると、このような途方も無い富が万人に黙認され生き残ったのはいよいよ驚くべきことである」（アンドレ・モーロア「英国史」下巻）。

上記は今も続いている欧米人の贅沢に対する態度である。人類の歴史上には、その時代の全世界の富を掻き集めた帝国、王国が多数存在する。バビロンがそうでありエジプトがそうであり、ギリシア、ローマ、スペイン、フランス、イギリス、そしてアメリカがそうである。之らの帝国、王国の上流階級は無制限の富を使って彼らの贅沢を完成した。そのような経験を持たぬ民族は「贅沢にはきりが、すなわち限界が無い」と考えるが、前記の帝国、王国の贅沢の流れを汲む民族は贅沢には限界があることを知っている。「限界」すなわち「十分に満足の状態」、もうこれで充分、人生は幸せだ、と感ずる状態がこの世に存在することを知っている。ファウストの「時よ止れ、汝はかくも美しい！」の叫びは贅沢の極致の端的な表現である。かつて王侯貴族の専有物であった「贅沢」は今世紀に至って一般化し、先進経済先進国にあっては多くの人々がかつての王侯貴族の贅沢を手近か、身近かに享受し得るに至った。例えば、かつて人類の夢であった“エデンの園”が地球上に無数に存在するようになり、之をリゾートと云う。豪華、豪奢、或は優雅、閑雅、瀟洒なリゾートホテルはギリシヤ、ローマの帝王の宮殿の再現——或はそれ以上——であり、そこで供される美酒佳肴も之に準ずる……どころか、現代の上質なワインの味はネロ皇帝の味わたった味の比ではないことは研究者の指摘するところである。贅沢を知り、贅沢に手が届くという認識が欧米経済先進国（自動的にレジャー先進国）民のレジャー（休暇）に対する熱意の根源である。彼ら彼女らは「余暇」つまりは「贅沢」が如何に素晴らしい快

楽をもたらすか、上質のワインが如何に天上の美味であるか、海浜のホテルでの数日が如何に忘れ難い一生の思い出になるか、つまりは「贅沢」とは如何に素晴らしいものであるかをよく知るが故に孜々として働き、断呼として休暇をとる。欧米に於ては贅沢は羨望、嫉視、反感の対象ではなく、何としてでも手に入れようとする人生の目標である。彼らが休暇を大切にするのは、贅沢の味を知っているからであり、贅沢は努力と才覚によって手に入る射程圏内にあると感じているからである。世界第二の経済大国民たる日本人にとって「射程」問題はない。1ドル100円及至150円の「円」は世界最強の通貨の一つであることは一步海外に足を踏み出したことのある日本人のよく知るところである。休暇未消化の理由の一斑は日本人が本当の贅沢の味を知らぬことによる動機付けの不足にあると思われる。

イソップ物語の狐は「あの葡萄はどうせ大した味ではないさ」と呟いてその場を立ち去った。若し狐が件の葡萄が如何に美味であるかを知ったならば、如何なる努力と策略を用いても葡萄を手に入れようと努めるであろう。

第4節 休暇をとらぬ日本人の例外例

前節で述べた通り、一般に日本のサラリーパーソンは権利として持っている休暇をとれない——或はとらない——傾向があるが、次の三者は例外である。

1) ノン・キャリア・ウーマン（この表現は日本語である。会社に勤めながら上級幹部職への昇進を特に考えていない女性を指す）

2) 役人と銀行員（役人に準ずる）

3) 大会社の従業員

1) ノン・キャリア・ウーマン

「キャリア」すなわち上級職への昇進ルートに乗り、意欲充分の会社員、役人は男女を

問わず休暇をとらない。休暇、家庭より仕事と昇進すなわち野心を優先するからである。この傾向は国籍を問わない。もっとも海外のキャリアは隙を見て豪華な休暇を人知れずとるのに反し、日本のキャリアはそれすらしない。それにひきかえキャリアに非ざる女性就労者の少なからざる人数は所与の休暇日数を十分に消化している徴候がある。海外旅行先、或はリゾート、又は広く海外のスキューバダイビングスポットで見かけられる日本人に女性が多いのは上記の理由による。多くの海外ダイビングスポット（遠隔島嶼が多い）に遊ぶ日本人の過半は女性であり、その多くがサラリーウーマンである。彼女らの多くは、見かけ30代、職歴も10年或いはそれ以上、独身で相当額の給与ボーナスをすべてレジャーに投じ得る立場にある。彼女らの表現を借りれば「今の状態を変えて手鍋さげる（結婚する）気は毛頭無い」。インドの僻地の空港で出会った女性の如く、リックサック一つで2週間の休暇をとってアジアを放浪する。年は30才、関西のある企業の従業員であり、休暇はいつもこの様に過すと語った。筆者の海外旅行経験によれば、このような女性に会う例は決して少くない。

2) 役人、銀行員、大企業の従業員

標題の三者を一括してコメントする。大企業、銀行、役所に働く人間が所与の休暇を余さず消化し得る理由は次の通りである。

i) 労働組合がしっかりしている。

ii) 監督官庁のプレッシャーが助けとなる。

iii) 客の反応を気にしないで済む強い立場にある。

iv) 近代化が進んでいる。すなわち、周囲のプレッシャーが比較的少い。

v) 自主性の強い、高学歴の社員が多い。

vi) 業績も安定している。

上記の中で着目すべきは第iii) 項であって、役所・銀行・大企業は“客”の意向を気にす

る必要が無い。客がこわくないから自分又は自分の役所や組織の都合だけで計画的に休暇を消化することが出来る。上記「例外例」を一瞥すれば日本経済新聞の紙面にしばしば登場する極く少数の企業、銀行、役所の従業員以外にとって「定期休暇」「長期夏休」「週40時間労働制」等は殆んど悪い冗句である事実が明瞭に看取される。つれて日本経済を実質的に支えている中堅未満の企業の従業員が一週間以上の夏休がとれぬ理由も了解される。

第2章 停年・引退

第1節 引退の潮時

人はいつ引退すべきか。この間に対して常に二つの答が用意されている。

- 1) 早ければ早い程好い
- 2) 出来る丈引きのばす

1)については終戦時(1945年)の多くの大会社の首脳陣の追放の例が引かれる。戦後日本の目ざましい経済成長の遠因はGHQ(マッカーサー司令部)の財閥解体と公職追放政策にあるとする説である。当時の日本の大企業の大巾な若返りが企業に活力と進取の気象を与えた。普通経済現象は反復実験を行い得ぬ為^に上記の説は証明のしようがないが、現在行なわれている実験——例えばDKBの役員の総入れ代え——は10年後に他行との比較に於て有意の結果を生む可能性がある。DKBの場合は役員のみならず上級幹部の大巾な若返りが行なわれたが故に、10年後、他行に比して大なる躍進が見られたとするならば企業幹部の引退は「早ければ早い程好い」。個人の家庭にあっても、古来、親の引退について同主旨の論がなされる。「子供の行く末が心配で死ぬぬ」と嘆く親のとり得る最良の選択は早く死ぬことだとす説である。何故ならば子供は苦境に遭遇する年齢が若ければ若い程立ち直るチャンスも増すと期待されるからである。

1)の「引退は早い方が好い」とする説は企業本意の考え方であるに反し、2)の出来るだけ引き延ばす方が好いとなす説は従業員自身の問題である。具体的には従業員自身の老後対策を踏まえての議論である。

次章以降で詳述する如く、わが国のサラリーバースンは老後の準備を欠く。休暇を十分に消化し得ず、半ば強制的に与えられた休暇をゴロ寝で過す人物(総務庁「社会生活基本調査」1996年)が充実した老後^を過せるとは思えない。彼ら(彼女らを含む。以下同様)は粗大ゴミ、濡れ落葉と擲^ぶ擲^まされ、無聊^{りよう}に苛^{さい}れ、ストレスを蓄積してゆく。この現象は本人にとっても社会にとっても好ましくない。一番手っ取り早い解決策は停年の延長である。停年を延長し、彼らの心身の許す限り出勤を続けさせ、無害な仕事を当てがう。必然的に職場の生産性は低下し、コスト(例えば事務所の空間^{スペース})は嵩み、企業、役所のリストラとは背馳するが、これは老人対策であってリストラとは次元を異にする問題であり、社会が支払うべきコストを企業、役所が立て替えたに過ぎない。同じ停年退職者を社会に放出した場合には、そのコスト(ゲートボールの為のスペース等)は社会が負担せねばならない。この場合、(イ)社会全体としてどちらの方法が安くあがるか、(ロ)本人達にとってどちらの方法が幸せであるか、(ハ)停年延長という型で企業が立て替えた老年対策費をどうやって「社会」に付け代えるか、等の観点から検討すべき問題である。わが国に於ては欧米経済先進国と異り、人々が必ずしもより早い引退を待ち望んでいない(と思われる)点を念頭に置いて検討すべきである。本人も家庭も当該者が出来るだけ長く通勤し、何がしかの収入を持ち帰ることを望むならば、そしてこのやり方の方が社会全体の負担を軽減出来る見込みがあるならば、停年延長は検討に値する。

第3章 老後の準備

第1節 老後の準備の経験則

平均年齢の延びにつれて増々長くなる老後を如何に充実して送るか、その為にとどのような準備をするべきかという設問に対して、次のような経験則が存在する。

「ある人の老後の過し方はその人の幼児期に決る」

具体的には「幼児期の家庭での情操教育」によつて決る。換言すれば「老後対策は停年近くになってからでは間に合わない」。

上記経験則は人々が各自の人生を振り返り、或は身近な人の人生を眺め、或は伝記、小説等を読み返えせば明瞭に看取し得る。人生とはセンチメンタル・ジャーニーである。人々は好むと好まざるとに拘わらず、自分の幼児期へと帰って行く。ある人がピアノを弾く、絵を描く、ヨットに乗る……その種子は非常に多くの場合、幼児期に播かれる。

ある母親が子供が7才になったので、音楽教師を訪れ、そろそろ音楽教育を始めたいがいつ頃から始めたら好いでしょうか、と尋ねた。教師は答えて、

「奥様、7年遅うございます」。

石原慎太郎氏——日本外洋ヨットのパイオニアの一人である——は自分のヨット歴について次のように書いておられたと記憶する。

「あるスポーツに対する親の強制くらい有難いものは無い」。

第2節 “Lead follow or get out of the way!” (脚注2)

ある人は幼児から絵を描くことを、楽器を

2) “Lead, follow or get out of the way.” CNNの創設者、米国屈指のヨット乗り、Ted Turnerの信条

「導くか従うかしないのなら、邪魔だからどいてくれ」の意。

奏ることを、山に登り海で泳ぎ、危険に挑戦することを好む。殆んど幼児がそのような衝動を身内に持って産れて来る。加えて、幼児は好奇心の塊である。従つて、上記経験則の「親の教育に依つて決る」の親の教育とは、

- 1) 幼児のそのような衝動の邪魔をしない。
- 2) 出来れば親が手を取つて、先に立って教える。
- 3) 幼児の衝動を助け、助長するような環境を整備する。

の三者にあると思われる。幼児教育の担当者は両親すなわち家庭であるが、国家社会もまた幼児教育を助成し、^{バックアップ}少くとも邪魔をせぬように注意する必要がある

政府のしている「邪魔」の一例を述べる。

地中海では学齢に達しない幼児、少年、少女が船外機（小型ガソリンエンジン）を着装したゴムボートを“下駄のように”乗り廻し、歓声をあげて遊び戯れている。日本に於ては機付のゴムボートの操縦には免許制が敷かれて（プレジャーボート、ヨットの免許制は海洋先進国に例が無い）免許の取得には少なからざる費用と時間を要し、尚且つ免許取得の年齢は16才以上である。幼児期から機付ゴムボートを乗り廻す子供と16才まで規制を受ける子供との間に海洋レジャーに対する馴染み方には自ずと大差が生じ、その大差はそのまま老年期に持ち込まれる。

第3節 回帰の旅

繰返すが、人間の一生は回帰の旅である。鳥や動物が自分の生活圏を種々な方法で大地や樹木に刻印するように、人間もまたものごころがつくつかぬうちに自分の生活圏を自分の周囲に刻印し、出来得べくんば拡張せんとする。その生活圏は物理的（例えば子供同志の縄張り）であることもあり、内面的（読書、絵画……）であることもある。人間が一生かかって拡張した生活圏が彼の老後の安住の地となる。すなわち人生は回帰の旅であり、

かつて自分が訪れた、すなわち刻印をした生活圏へのセンチメンタル・ジャーニーが余生である。

若者は押え難い衝動に駆られて山の彼方へと旅立ち、美しい土地を発見し、いつの日か愛する人と共にこの土地を再訪して感動を共にしたいと夢見る。その土地は地理上の土地であるかも知れず、内面的、精神的、形而上的「土地」であるかも知れない。「愛する人」とは老境に入った自分自身であるかも知れない。

幼児期は幼年期の準備であり、幼年期は少年期の準備であり、少年期は青年期の準備であり、青年期は壮年期の準備であり、壮年期は熟年期の準備であり、熟年期は老年期の準備であり、老年期は死への準備であり、このプロセスは生物現象であるが故切断することは出来ない。

故に充実した老後を過すためには幼児期からの準備が要る。老後の人生の（経済的でない）設計を停年退職間近に開始するのは手遅れであり現実的でない。政府予算は単年を単位とし、経営もまた一期を単位とするが、教育は20年すなわち一世代を最小の単位とし、老後の設計は一生涯が単位である。近年高周波その他を用いてワインを十数分で熟成させる技術の開発が伝えられるが、人間はワインではない。

多くの実例が示すように、老後に絵画を楽しむ人は幼年期から絵画に親んだ人であり、音楽、スキー、登山、ヨット等についても同じことが云える。ある人がある才能を持ち、成長期に機会、環境に恵まれず、壮年期以降に何らかの機会に触発されて才能を開発される例はむしろ例外例と思われる。親と教師と社会と政府とは、幼児、少年少女に対し、彼らの老後の人生の充実の為の情操教育に意を用うべきである。

第4章 老後の passtime の実際

第1節 分類

老後の人生の充実——すなわち幸福——を計る為の余暇の過し方は、老後にあらざる余暇すなわち休暇の過し方と変りはなく、次の如く大別し得る。

- ① 社会奉仕
- ② 創作或は芸術活動
- ③ スポーツ
- ④ 鑑賞の楽しみ
- ⑤ Kill time (時間殺し——直訳。日本語では所謂“暇潰し”)
- ⑥ 死ぬまで働く
- ⑦ 無為

第2節 具体的内容

①の社会奉仕については特に云うことは無い。老後を社会奉仕に捧げる人物に老後の passtime の問題は無い。

②の創作芸術活動には次の三分野が考えられる。

- i) 美術——絵画、陶芸、写真、園芸、屋内装飾、盆栽、手芸百般（含料理）等々。
- ii) 音楽——楽器演奏、歌唱（カラオケは別項）、謡、歌舞音曲全般……
- iii) 文筆——小説、エッセイ、紀行、俳諧、自伝、等々。

* 絵画について

創作・芸術活動について絵画を例に考察する。

人間は造型の才能を持つ者と音楽的才能を持つ者にと大別される。この差は殆んどDNAに起因すると思われるが故に、多くの場合互換性に乏しい。具体的には、音楽的才能の子供に絵の勉強を強いること、或はその逆は多くの場合徒勞である。この場合「好きなこ

とをやらせる」という人生哲学は正しい。但し、この哲学が正しいのはこの段階までであって、老後の人生の充実という観点に立てば自由放任策は百害あって一利もない。絵画も音楽も芸事げいごとであって、基礎の学習を怠ったものに進歩はなく進歩の無い者に楽しみは無い。ピアノの鍵盤ひんを叩けば音は出るが、曲を奏つづみそうとすれば習練が要る。バイオリン、鼓に至っては練習無しには音も出ない。音楽について常識的な認識が絵画の場合には何故か無視される。個性と称して幼児、年少者に絵筆を持たせてぬたくらせるのは個性と称してピアノの鍵盤を無作為に叩かせるのと何等変らない。

音楽に於ての練習に当るものは絵画に於てはデッサンである。ピカソは晩年までデッサンの勉強を怠らなかつたと云われる。デッサンとはボールがボールに見えるまで、茶筒が茶筒に見えるまで白紙の上にカーボンを走らせる習練のことである。恐らく幼児、年少者にとっては退屈な、時には辛い習練であるが(そうでない者もある)、デッサンの不確かな人はやがて絵を描くことに倦きる。いくらあせっても、ぬたくっても画面がまとまらないから興味を失って止める。指が動かなければ曲は弾けないのと同じである。

デッサンは語学と同じく、幼児期少年期にしっかりたたき込まれねば成年以後のもの役には立たない。老年に至って幼児期の親又は教師の放任主義を恨んでも手遅れである。再び石原氏の言葉通り「子供時代の親の強制くらい有難いものはない」。リンゴ、茶筒、ボール、或は石膏アグリッパを睨んで何枚も何枚も紙面に木炭を動かす習練——それが楽しいと思う子供も(時に大人も)いる——が、それだけが画面に骨格を与え、彼又は彼女に長続きする絵を描く楽しみを与える。壮年期には彼又は彼女は恐らく絵筆をとる余裕は無いであろう。だが彼は展覧会を巡って絵画を觀賞する楽しみを持ち、建築物や服飾、或は自社他

社の広告媒体を批判する秘かな楽しみを持つ。デッサン力は水泳や語学と同じく、長い中断の後にも一寸した練習によって元の水準まで戻るものである。老境に入った彼又は彼女は美しい自然、人物、静物を描きつつ静かに余生を送ることが出来る。

③のスポーツ(肉体運動)には次の4種類の分類がある。

- イ) (a) フィールド運動範囲が限定されているもの。
(b) 限定されざるもの
- ロ) (a) 球技
(b) 球技に非ざるもの
- ハ) (a) 集団で行うもの
(b) 孤独で行うもの
- ニ) (a) 競技
(b) 競技に非ざるもの

*老人に適したスポーツ

一覧して明らかなる如く、いわゆるスポーツの殆んどは球技であり(ロー a)、球技の殆んどは競技(ニー a)であり、フィールドが限定され(イー a)、集団で行なわれる(ハー a)。野球、サッカー等が好例である。

考えるまでもなくハー a の集団スポーツは老後の人生には不適當である。理由は2つある。

i) 集団を結成する困難(メンバーを集めねばならない)

ii) 集団の人間関係を推持する困難。

わが国に於て最も一般的な老人のスポーツと考えられているゲートボールの問題点は、人間関係の破綻たんがあると報ぜられる。つれて競技スポーツ(ニー a)も老人には適さない。競技とは勝負であり斗争であり、人々は勝敗に熱狂し、勝てば誇り負ければ齒ざりする。必ずしも高度の精神活動とは云い難く老人の精神衛生上も好ましくない。ゴルフ場でパットの最中に心臓発作で倒れる老人は少くない。勝負に賭けるのは壮年迄の生き様であって、

老人の^{キーワード}標語は relax (力を抜く、緊張を解く、寛大、弛緩、くつろぎ、楽にする……) である。

イー b のフィールドを限定されぬスポーツの例は、登山、山スキー、ヨット (による巡航航海)、^{トレッキング}山野散歩、同じく乗馬に依るトレッキング……等々であり、殆んど球技を含まず (ロー b)、集団ではなくとも行い得る (ハー b) から老後の人生の充実に適する。

このようにスポーツの分類表を眺めれば、自ずと老人に適したスポーツが見えて来る。

- i) 集団に非ざるもの (ハー b)
 - ii) 競技に非ざるもの (ニー b)
 - iii) 出来ればフィールドが限定されぬもの (イー b)
- である。

*ふれあいと孤独

世人の先入主に反し老後に必要なものは「ふれあい」ではなく「孤独」である。少くとも望む時に独りになれる環境である。之を privacy と云う。対人接触、対人関係は常に人を疲れさせ苛立たせる。老人の場合には特にそうである。老人は気力体力が衰えている故、対人関係の煩わしさに耐えられない。多くの老人が不気嫌なのは対人接触を厭うからである。公園のゲートボール集団が往々にして続かないのは、ある人物がボス化し、或は派閥が生じて人間関係が破綻するからだと言われる。老人を責めてはいけない。同じようなことは青年、壮年のスポーツ集団にも起こる。ただ、老人はそのような人間関係のストレスに耐える体力と気力を失っている故、不気嫌で怒りっぽくなるのである。老人が切望するのは「心からの愛情」と「やさしさ」であるが、この二つは健康な成人でも仲々手に入らない。老人はわがままである。わがままは老人と幼児 (女性とは云わない) の特徴である。もし社会が心底から老人対策を考えるなら、社会は老人のわがまま——放って置いて呉

れ! だが必要な時には他意の無いやさしさと愛情とを惜しみ無く注いで呉れ!——に耐える覚悟と準備をしなければならないが、それは殆んど無いものねだりであるから、老人は自らの力で老後の幸福を克ち取らなければならない。

* Enjoy yourself !

異国のバーを訪れると注文した酒をカウンターに置いたバーテンダーが “Enjoy yourself !” と云って去る。「どうぞごゆっくり」と云う程の慣用向であるが、この一句「あなたご自身をお楽しみなさい」が老後の人生の key word である。

* ゴルフについて

ゴルフは老後に最適なスポーツの一つである。ゴルフはまた人間の考え出した最も面白いスポーツである。奥が深く「最終スポーツ」の名に恥じない。最終スポーツとは、そのスポーツの世界に入るとまず出て来られぬ位興味深く奥の深いスポーツの呼称である。テニス、ヨット、scuba 等もこの中に入る。

ゴルフは運動量が適度であり、競技者の合意に依って運動量と競技時間を適宜調節し得る便宜があり、同行者の選択を誤らねば社交の楽しみも併せて享受し得る。世人の先入主に反し、ゴルフは孤独を楽しむスポーツであって集団競技では無い。3、4本のクラブを携えて一人コースを廻るのがゴルフの醍醐味であり、この場合競技の相手は自分自身である。

戦後日本のゴルフは次の3点 (ゴルフとしては変則的な) に依って大衆のものとなった。

- 1) 会社化 (営業化。企業に依る経営)
- 2) 社用化
- 3) 集団化 (すなわち競技本意)

の3点である。

戦後日本のゴルフクラブは「クラブ」では

なく「会社」である。企業が運営し、会員権を企業に売るという天才的な発想によって一大産業となり、加えて薄給なサラリーマン階層を「社用」によって経済負担から解放した。今やサラリーマン（女性はまだ少い）階級は主たるゴルフ人口である。「クラブ」から「会社」へという独想的システムは次の様な利点を社会にもたらした。

イ) 価格の低廉化

もとより日本のゴルフ場の価格とプレイ代は諸外国に比し桁ちがいに高いが、その費用は企業が負担する故ゴルフは一般サラリーマン（近年はウーマンを含む）の間に急速に普及した。大中企業の従業員のみならず、中小零細企業（例えば駅前商店街の各店）の経営者、従業員及びその家族（夫人）もまた社費によって会員権を取得し、ゴルフに興じているのは周知の事実であり、1996年のゴルフ場入場者数は9947万人（第24回全国ゴルフ場調査、日本経済新聞社）、日本の人口に近い人数がゴルフを楽しむに至った。

ロ) スポーツの大衆化

欧米スポーツ先進国民に比べて日本人は能動的にスポーツに親しむことの極端に少ない民族である。肉体的運動としてのスポーツの欠落は老人を含む日本国民の健康管理上由々しき問題と考えられる。その中であって、ゴルフは日本の勤労階級、中年熟年男女の殆んど唯一のスポーツとの接点である。非常に多くの日本人にとってゴルフは彼らの知る唯一の肉体運動であり社交機会であり、殆んど唯一の生甲斐であることを指摘するのは日本人の老後対策を考える上で重要である。

ハ) 罪悪感からの解放

日本人は「遊ぶ」ことに抜き難い罪悪感を持っている。ゴルフは社用化することに依って日本人の遊びに対する罪悪感を^{ねつしよく}払拭した。会社同志のゴルフコンペ、取引先とのコンペは殆んどの場合セールス・プロモーション、人間関係の醸成の名を借りたりクリエーショ

ン、つまりは遊びであり、社用として支払われる費用は交際費と云わんよりは厚生費である。ゴルフのみならず、日本の多くの会社は温泉地の旅館に——週日に——研修会、業務打合わせ、取引先招待会、商品展示会、組合大会……等の名目で従業員を送り込み、日中型通りの上記の「業務」をこなして罪悪感を払拭した後、夕景から深夜まで宴会、ゲーム、カラオケバー等で人生の歓を盡くしていることは、件の温泉地のホテルの経営に関与した筆者の熟知するところである。

*テニスについて

テニスもゴルフと同じく極く小集団——2人又は4人——でするスポーツで老年に適する。欧米のリゾートに於て老年者が終日ラケットを振る光景は少しも珍らしくはない。テニスもゴルフと同じく競技者同志の合意に依って運動量・時間を適度に調整することが出来、社交的要素——すなわち楽しみ——を多分に持つ。ゴルフに比べて僅かな面積で足りる故、居住地、住宅地内又はその近傍にコートの設置が可能である。但しテニスはゴルフと違い、球が往復せねば競技が成立しない。ゴルフと同じく、或はゴルフ以上に基礎的技量の習得を必要とする。老後の楽しみに必要な技術のレベルは——テニスもゴルフも——そんなに高くないから、親、教師、地域社会は子供達の幼児期少年期に彼らに基礎技術の習得を“強制”することが彼らの老後の幸せに益すると思われる。

④ 鑑賞—受動的楽しみ

人生を楽しむ方法は2つある。

i) 能動的楽しみ方

ii) 受動的楽しみ方

の2つである。彼又は彼女が老後に生物学に興味を持ち、ボートを漕ぎプランクトン・ネットを曳いてプランクトンの採集をするならば前者であり、部屋に籠って「ビーグル号

航海記」に読み耽るなら後者である。家族共々ニセコにスキーに行けば前者であり、テレビで長野オリンピックを見るのは後者である。

受動的楽しみは便宜上また2つに分け得る。

A類：絵、音楽、文学、演劇等の鑑賞

B類：スポーツ見物、テレビの娯楽番組の視聴等

A類B類の分類規準は、後者は準備を必要としないのに反し、前者は場合によれば幼児期からの修練を必要とする点にある。

音楽、絵画を能動的に楽しむ為に習練を必要とすることは当然であるが、受動的に楽しむ、すなわち鑑賞する為にも習練素養は欠かせない。秀れた絵画、音楽、建築、文学の美しさに心を打たれ、時の経つのを忘れることは恐らく老年で可能な最高の愉楽と思われるが、そのためには経験と努力が要る。その上に体力まで必要とするのが美食の楽しみである。

*味覚について

美酒美食の味が本当に判るためには50才を過ぎる必要があると云われる。何故なら若い頃は旺盛な食欲が「鑑賞」を妨げる。性欲に似ている。一方老後は体力の衰えにともなって食欲も消化力を減ずる。健啖なる欧米人といえども「人生を楽しむ為には鉄の胃袋を必要とする」と時に慨嘆する。口腹の欲は性欲の衰えた後も続く。人は死の前日迄食事をする。何時まで、何才まで美食美酒を楽しむ得るかは老後、余生の最重要課題の一つであるが、味覚とは老年に至って突如発達するものではない。かつてのホテル・オークラの菓子職人であり名店「ルコント」の主人であるムシュー・ルコントは「子供の時からおいしい菓子を食べさせねば大人になってから味が判らない」と云った。あるフランスの哲学者も「文明とは菓子を作る香りが家の中に漂うことだ」と書いている。チャールズ・グ

レーブス（詩人ロバート・グレイブスの弟）は“The Rich Man’s Guide to Europe”（1966）の中で、海外旅行に適する年齢を40才から60才と規定し、海外のリゾートで見る最も悲しい光景は(1)子供と(2)70才代の人間 septuagenarians——筆者が該当——を見ることであると断じ、子供はまだいいが、彼ら（70才代）の味覚は疲れ果てた、彼らは待ち過ぎた（Their palate is jaded. They have waited too long）と嘆じている。

*読書について

かつて季鴻章は、人生でどのような人が不幸であるか、と尋ねられ「読書の楽しみを知らず、雨の日に無聊を託つ人である」と答えた。エレノア・ルーズヴェルトは「神が私に『子供にたった一つの才能を与える』と云われたら好奇心と答える」と云った。読書とは好奇心である。子供は好奇心の塊りだが「読書」は強制出来ない。読書を強制することで子供を本嫌いに育てることは大学の外書講読に似ている。外書講読は良書の死体解剖であると云われる。誰が解剖された美人の死体に恋するであろうか。多くの名著良書が教科書に使われることに依って学生から嫌悪の対象にされる。子供を読書に親しませる唯一の方法は、良書を常に書架に並べて置くことであり、親が読書に親しむことである。そしてある日、子供が一冊を抜き出して読み耽る日を待つしかない。この方法——方法なのだろうか——は他の無数の趣味についても云える。

ウエリントンは「ワルテルローの戦勝の因はイトンの校庭に於て培われた」と云った。ある人の老後の幸せは彼らの幼児の家庭に於て培われるのはまぎれもない事実である。教育は20年が単位なら人生は全生涯——揺籠から墓場まで——が単位である。

⑤ kill time（時間殺し）、暇潰し

この項目は如何なる「分類」にも必ず附帯する合切袋がっさいぶくろであって、安直な暇潰しの宝庫である。

- i) 賭博性娯楽：パチンコ、マージャン、競輪競馬、……
- ii) 勝負ごと：囲碁、将棋、トランプ、……
- iii) その他：カラオケ等……

注) i) と ii) の境界は往々にしてさだかでない。

⑥ 死ぬまで働く

第2章停年の第2項「出来るだけ引き延ばす」に詳述。

終章 ⑦ 無為について

人間は老後に何かをしなければならないのだろうか。

もし日本の老人が家族を含む自らの生活を死ぬまで自力で支えねばならぬのであれば、彼又は彼女は死ぬまで働かねばならない。その場合、老人問題は経済問題であって「余暇」問題ではなく筆者の守備範囲を逸脱する。

多くの海外リゾートの浜辺、或はプールサイドでは多くのバカンス客が終日カンバスチェアの上で日光浴をする姿を見る。或はまた米国有数の引退者の町、マイアミ、或はフォート・ローダーデルの路傍の(立派な)ベンチに終日坐り続ける老人の姿は日本人旅行者を驚かせる。日本人にはあのような行動(行動?)は理解出来ない。何故ならば日本人にとって無為は罪悪だからである。日本人は“何もしないでいる”ことに耐えられない。正確には、何もしないでいることの罪悪感に耐えられない。然るが故に日本の社会は老人の老後対策として、既に列挙したような凡百の余暇の過し方、暇潰しの施策の準備に忙殺され、その財源探しに奔狂する。日本人が何もしなくなるのは何も出来なくなった時であ

る。一体そのような(せわしない)状態を余暇或は余生と云うのであろうか。

筆者が毎年夏休を過す地中海のある島のヨットハーバーに浮かぶ30フィートがらみのモーターボートに一人の老人が一匹のアフガン・ハウンドと住んでいる。老人はアントニオと云い、大の名はビンゴである。老人は60才の半ば(筆者より若い)で引退し、マドリッドに家があり、ヨットハーバーの近くの別荘(実はアパート)に妻君と義母を住ませている。スペインとしては一流企業の引退者だがとりたてて云うほどの金持ちではない。彼は年金で暮している。スペインの一流企業の引退者は上記のような余生を年金で送られるらしい。アントニオは立派な顔立ちの白髪の穏かな老人で、いつもビンゴをつれてゆっくりとハーバー内を散歩している。それ以外に何もしていないことは少しつきあっているうちによく判った。親しくなってから彼は私を彼のボートに招いて呉れ、奥方の手料理でもてなしてくれた。彼の行動は全く自然であって、ゆったりとし穏やかに「満ち足りあ余生」を絵に描いたようにハーバーの岸を散歩している。何もしないで愛犬と散歩をする毎日を送っていることに微塵みじんの後めたさも感じぬ風情である。そのような老人は、この土地では珍らしくないから周囲も彼に何の関心も示さない。すなわち、老後をしあわせに送る7番目の方策は無為である。筆者は本論中で何回か「老後の余暇活動」という言葉を使った。反省するに「活動」という言葉は「余暇」「老後」にはそぐわない。「競技」「勝負」と同断である。にもかかわらずわが国の識者は「余暇」という言葉はおかしい。「本暇」と称すべきだと息巻く。「本暇活動」か……何やらしんどくなる。聞くところによれば、サルトルは戦後のフランスの若者の生態ビヘビアを評し、「彼らは“自由”という刑に処せられている」と云った。日本人は“無為”という幸福に耐えられるだろうか。